

## 秋播き草花を植えてみよう

### 1 種を播くのは適期を逃さず！

一般に秋播き草花の種播きは、「彼岸花」の咲く頃～彼岸まで＝9月20日前後」が目安とされていますが、倉敷地域ではこの時期は平均気温22～23℃と一般的な秋播き草花の発芽適温「15～20℃」には高過ぎます。倉敷地域の平均気温で15～20℃前後なのは9月下旬～10月下旬なので、生育の日前後を目安にそれぞれの品目に合わせて種播きするのがよいでしょう。

#### 主だった耐寒性一年草(秋播き)の発芽適温

20℃:	ネモフィラ、ダイアンサス
15℃～20℃:	キンセンカ、クリセンセラム、パンジー、ビオラ ポピー(ハナビシソウ、ひなげし、アイスランドポピー)
15℃:	ワスレナグサ

### 2 一言で‘種播き’というけれど…

植えようとする植物の種播きの仕方などは、‘種袋’に書いてあります。これを参考にしてそれぞれにあった‘種播き’をしましょう。

(1)種播き用土には、市販の種播き用培養土を使うのが容易です。自分で準備する場合は、赤玉土(小粒)とピートモス(または3～5mm目のふるいを通した腐葉土)の等量配合した土を使えばよいでしょう。この他に、ピート板やバーミキュライト単用なども使えます。

(2)種播きには、育苗箱や2～3号のポリポット、連結ポット、圧縮ピートなどを用います。大切なことは、種まき用土を深くし過ぎないことです。深過ぎると土の量が多過ぎて乾きにくく根腐れが起き易くなるので、3～5cm位にしましょう。移植を嫌う種類には根鉢の土を崩さずにすむビニールポットや圧縮ピートに、種が微粒なものや好光性(光が当たらないと発芽しない)種子のもの(光が必要かどうかは種袋に書いてあります)はピート板に播いた方が発芽やその後の生育が良好です。

(3)種は発芽から本葉3枚位までの間は種自身の力で育ちます。ですから、種播き用土には肥料分は入れないのが基本です。育苗期間が長いものには肥料分が必要な場合もあるので、必要に応じて薄め(1,000～2,000倍希釈)の液肥を施しましょう。ピート板や圧縮ピートなど予め肥料分が添加されているものもあるので、用いる用土に肥料分が含まれているかどうかよく確認して使用しましょう。

### 3 苗や球根で植えたいけれど…よい苗、球根選びがよい花を咲かせる近道！

(1)苗を購入する際は、「全体ががっしりしていて、株元からよく分枝し、葉色が濃いもの」を選ぶようにしましょう。逆に、「ひょろっとして株元がぐらつき、節と節の間が間延びしているもの」は避けた方が無難です。

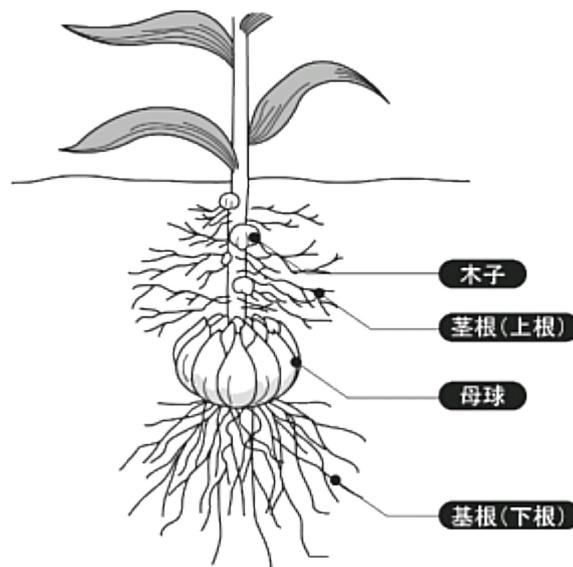
(2)開花期間が長い種類のもは、生長に伴い花蕾が順次出てくるので苗の時点で少なくとも問

題ありません。しかし、一季咲きで枝先に花を咲かせるものは、枝数や花蕾が多い苗を選ぶようにしましょう。

(3) 春植え球根の多くは、球根を植えつけると同時に発根、発芽して生長しながら花を咲かせ始めます。つまり、生長しながら花を咲かせる栄養を作って(蓄えて)花を咲かせるので、球根の大きさは開花にそれほど関係しません。それに対して秋植え球根の多くは、秋から冬にかけて根を伸ばし、春になると同時に茎や葉を伸ばして花を咲かせます。つまり、(球根に)蓄えられていた栄養で花を咲かせるので、球根の力(大きさ)が開花や花の質に関係します。購入する時は、できるだけ大きくて、病害虫の被害を受けていないものを選びましょう。

(4) 球根を植えつける時に注意することは、植えつける深さと間隔です。厳密に言えばそれぞれ種類によって適した深さや間隔がありますが、一般的には「深さや間隔共に球根2個分程度あける」ようにしてやれば問題ないでしょう。ただし、コンテナや鉢に植える時とユリの球根を植えつける時は例外です。前者は根が十分伸びるスペースを確保するために「深さは球根の先端が隠れるくらい、間隔は球根2個分あける」ようにしましょう。また、後者は、ユリは球根の下部だけでなく上部にも根を伸ばすので、上部の根が伸びるスペースを確保するために「深さは球根2個分以上あける」ようにしましょう。

#### ユリの根の出方



[\(戻る\)](#)